

クロスカルチャー出版 最新ニュース【書評】

光本 滋著『2020年の大学危機—コロナ危機が問うもの—』の書評が『週刊読書人』2021年8月6日号に掲載されました。

光本 滋著

2020年の大学危機

コロナ危機が問うもの

授業が受けられる、オンライン（授業の録画を見る）の場合は好きな時間に受けられるといった理由からである。



Crossculture Publishing Company Ltd.

いまだにコロナ禍は進行中で、大学はそれに翻弄されている。これからの大学のあり方を考えるためには、本書を読んだ、コロナ禍に直面した大学の危機を認識することが必要である。コロナ禍が終息しても、以前の大学に戻ることはありえない。ほとんどを対面授業で行い部活などの学生活動の充実を目指すのか、それとも、対面の必修科目を4年次の卒業演習に限定するなど、遠隔授業を主体にして授業料を下げるのか。

本書第1章はコロナ禍により大学が機能しなくなった状況を記している。2020年4月、多くの大学で新年度の授業開始が延期され、学内への立ち入りも禁止になった。かわりに遠隔授業で対応することとなり、教員は急遽オンライン授業のための教材づくりや機

器の操作方法の習得に追われた。様々の授業に合わせて数千名の学生が同時に大学の通信回線に接続したために、サーバーがダウンする事態がおこった。学生側では「授業環境が整っていないため授業に参加できないケースが出てきた。

さて、泥縄式で行われたオンライン授業は、これまでの対面授業とどう

異なるのか。第2章は「オンライン授業の光と影」である。ここでは、全国の大学で行われたアンケート調査を整理・検討している。実は、オンライン授業の満足度が意外に高い。通学時間が節約できる、自室から

コロナ禍で直面した危機を検討

ポストコロナ時代の大学のあり方を考える

高橋 寛 人



A5判・172頁・2200円
クロスカルチャー出版
978-4-908823-85-5
TEL. 03-5577-6707

新学期の直前、オンライン授業であっても「面接授業に相当する教育効果を有するもの」であれば、卒業に必要な単位としてみなしてよいという通知を大学宛に発した。しかし、その基準についての文科省の見解が明確りそうである。

第5章は「ポストコロナの大学像」について、大学の目的とは何か、学生の学習権をいかに保障するかといった原理に立ち返って考察すべきことを主張している。確かに、大学が大きく揺らいでいるときこそ、大学の本質的な意義を確認することが大切であろう。（たかはし・ひろと）
浜市立大学教授・教育学・教育行政

ちによる学費減額・返還運動をとりあげて考察している。

第4章は、コロナ禍の中での政府の施策についての検討である。

政府は大学授業のオンライン化をどのようにとらえているのだろうか。文科省は2020年度の

性を欠いているために、大きな混乱を招いた。

昨年12月、「国立大学法人の戦略的経営実現に向けた検討会議」の最終報告書が出された。これはコロナ禍前の「経済財政運営と改革の基本方針2019」に基づいたもので、国立大学を「社会委



★みつもと・しげる

北海道大学准教授・教育学・高等教育論。中央大学大学院文学研究科博士課程退学。著書に『危機に立つ国立大学』、共著に『新基本法コンメンタール 教育関係法』など。一九七〇年生。